

長崎に関する様々な資料が一堂に

— 長崎歴史文化博物館が所蔵する資料から —

長崎市教育委員会文化財課学芸員 徳永 宏

長崎歴史文化博物館は、長崎県と長崎市が共同で設置した博物館で、全国的にも珍しい施設です。

なぜ、両者が共同で設置することになったかという点、この博物館のテーマである近世長崎における海外交流史に関する資料がこれまで長崎県立美術博物館・長崎県立長崎図書館・長崎市立博物館に分かれて所蔵されていたため、利用者にとっては不便な状況が続いていました。そこ

で、長崎に残る海外交流史関係資料を一堂に集め、その情報を発信する博物館を目ざして、この施設が誕生したのです。

でも、どうして県と市がばらばらにこうした資料を所蔵することになったのでしょうか。それは明治維新にまで話が遡ります。皆さん、御存じのように、長崎は江戸時代を通じて、この地を治める長崎奉行は江戸から赴任してきました。幕末の慶応四年（一八六八）一月、当時の長崎奉行河津伊豆守は、鳥羽伏見の戦いにおける幕府軍敗走の知らせを聞き、長崎か



長崎歴史文化博物館展示室

ら退去することになりました。そして、長崎の支配をここに蔵屋敷を構えていた諸藩と長崎の地役人に託したのです。奉行所が変わり、新たに発足した長崎会議所が長崎の町を取り仕切ることとなりました。その後、長崎は明治時代に入って、長崎府、長崎区などとなり、明治二十八年、市制が施行され、長崎市となりました。

この間、長崎奉行所にあった各種の文書などは散逸の憂き目に会い、また、市中にあった美術工芸品は市外に流出するものもありました。これらの貴重な資料の散逸を嘆いた市民たちが、地元でその受け皿を作ることにしたのです。

明治二十七年には、新橋町（現諏訪町）に「長崎文庫」が創設され市中に散逸した資料が集められました。明治四十五年には県立長崎図書館が開館すると、そこに資料が移管されました。当時は県立の美術館や博物館がなかったため、美術工芸品もこの図書館が収蔵したのです。昭和四十年に長崎県立美術館が開館すると、それまで図書館が所蔵していた美術工芸品は美術館へ移されることになりました。

一方、長崎市では昭和十四年に博物館を建設しようという機運が高まり、日本紀元二千六百年にあたる昭和十六年、「長崎史料博物館」（後に長崎市立博物館と改称）が長崎公園内に開館しました。ちなみに、博物館は旧商工奨励館の建物を利用しました。商工奨励館は、明治三十年開設の商品陳列所が昭和五年に商工奨励館へ改称しています。この博物館の核となった資料は、長崎区の第四代区長金井俊行が市中に残る資料の収集・筆写事業を行い集めたものや、昭和十年代の『長崎市史』編纂事業の際に集められた資料が中心となりました。

その後、さまざまな美術工芸品・歴史資料・古文書・地図が集められて三館の合計で約六万点となりました。これらの資料が、今回、長崎歴史文化博物館へ一堂に集まったことで、研究者の方が県と市の資料を比較しながら研究したり、博物館も魅力のある展示を企画できるようになりました。

風信

○先月、四月十九日の報道関係の記事は全て伊藤長崎市長の事で満ちあふれていた。心より御冥福申し上げると共に、私にあたたかく励ましの手をさしのべて下さった事を思い出している。

○先日、カステラの老舗・松翁軒主人の山口貞一郎さんより文政四年（一七二二）の和菓子製法の古文書を見せて戴いた。その中にカステラ製法の事が次のように記してあった。

○カステラ。うどん粉壹升、玉子十五、さとう百五十目とり合せ すり鉢にて良くすり、カステラ焼鍋にて上下より炭火にて焼申候。竹串にて通し見候は串へ付き不申候えは、焼成り申候。当時のカステラには、まだ現在のように材料に水飴が加えられて無かったので早くパサパサになっていたであろうと考えている。

○先日「地雷のあしあと―戦争が終っても地雷は消えない」の著者で有名になられた童話作家で詩人でもあられる、こやま峰子女士来訪さる。用件は長崎出身で、国父孫文先生を大いに援助した梅屋庄吉の取材との事であった。御一緒に庄吉が通った榎津小学校跡などを訪ねた。女史は長崎の街では「誰にあつて話をきいても皆さん御親切ですね」と言つて嬉んで下さった。

○北京大学留学中の小圓晃司氏より、同大学で日中文化交流を主題に論考されている論文集「日本学13輯」に発表された「近世長崎文化及其影響」に、私の名前まで併記して戴き大いに恐縮し感謝申し上げている。（北京大学・世界知識出版・定価三五元）

○翌日、食文化研究「ウエスタ」66を戴く。そこには「毒のある食物―私達はその毒にどのようにつきあつてきたか」を主題に各種の論考が集められており思わず引き込まれて読みふけてしまった。

○長島俊一氏より「西道仙」の評伝を戴く。道仙はたしかに「明治維新の長崎を駆け抜けた快男子であった。」ことが良く理解された。（長崎文献社 一六〇〇円）

○六月より事務局担当の上田女史異動により、丹田女史に担当して戴くことになりました。協会は月・水・金の午前十時より開館しておりますので、ご自由にお立ち寄り下さい。

ここで、県と市の資料が一つになった例を御紹介しましょう。長崎市は、明治二十八年の市制施行以来、隣接する村や町と合併し市域を拡大していきました。その中には、江戸時代の天領のみならず、大村藩の領地や深堀鍋島領・諫早鍋島領が多く含まれています。とりわけ、旧大村藩領は、長崎市の面積の約半分を占めています。最近では、平成十七年に外海町、平成十八年には琴海町と合併しました。

昔の言葉に「一所懸命」（現在は一生懸命）という言葉がありますが、江戸時代において生活の糧を得る土地を巡る争いは、田畑などの耕作地のみならず、漁場や山野にも及び、その境界争いは、役人により仲裁されたり、他領との境界争いについては、双方の役人が示談した上で、境界石を設置したり境界を書き記した地図の交換を行って、後日の証となりました。

長崎市北部の三重地区は、江戸時代には、大村藩と深堀鍋島領の土地が入り乱れており、こうした境界争いがありました。大村藩の編纂資料である「九葉実録」の宝暦二年（一七五二）九月の記事（巻之十七）には、

六日はヨリ先キ我藩及ヒ佐賀藩久ク三重ノ境界ヲ争フ 此日彼我ノ吏人協議判決シ、地図ヲ交換ス

と記されています。この実録に記されている地図のうち、7枚が現存し博物館が所蔵しています。これは、県立長崎図書館の郷土課から長崎歴史文化博物館へ移管されたものです。そして、この宝暦二年に境界上に置かれた塚について記した「三重村境筋塚帳」が長崎市立博物館から長崎歴史文化博物館へ移管されました。この資料は、大村藩が幕末に郷村記を編纂するときに総調役を勤めた峰源助の一族が所蔵していた資料の中の一つです。これを読むと両者が共同で建てた塚と各藩（領）が交互に建てた塚があることが記されており、図書館から移管された地図を見ると確かにそうなっていたことが分かります。

また、長崎県が誇る美術工芸品も、当館二階の常設展示室に県と市の所蔵品が仲良く並んでいます。長崎の歴史と文化を是非御堪能ください。

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一 一五四〇
十八銀行公会堂前出張所 2F

